

2-8. 獅子神楽・獅子舞に見る歴史的風致

(1) はじめに

市内各地区の神社の例祭等では、獅子頭を用いた獅子神楽や獅子舞が奉納されている。民俗学的には、大きくは獅子舞として分類されるものであるが、獅子頭に前足役と後ろ足役の二人立ちのもの^{ふたりだ}と、角を付けた獅子頭を一人で被る一人立ちのもの^{ひとりだ}がある。後者は三頭立て^{さんとうだ}で、「獅子踊り」「三匹獅子舞^{さんびきししまい}」などと呼ばれる。ここでは、便宜上前者を獅子神楽、後者を獅子舞としたい。香取市域では、現在次のような地区で獅子神楽、獅子舞が保存会などにより継承されている。

	名称	分類	奉納日	場所	地区	市指定
1	大崎の大和神楽	獅子神楽	4月第一日曜日（祭礼）	白幡神社 大六天神社	大崎	昭和52年6月1日
2	新市場神楽	獅子神楽	5月下旬（春祈祷） 12月23日（おびしゃ）	天宮神社	新市場	昭和60年6月1日
3	本矢作区の神楽	獅子神楽	3月第一日曜日（春祈祷） 12月第一日曜日（御鎮事）	天宮神社 天降神社	本矢作	平成8年7月1日
4	下小野神楽	獅子神楽	4月第一日曜日	八幡神社 稲荷神社	下小野	平成14年1月4日
5	浅黄の神楽	獅子神楽	4月10日	祖波鷹大神	岩部	未指定
6	多田の獅子舞	獅子舞	4月第二日曜日	妙見神社	多田	昭和47年6月29日
7	返田の神楽・獅子舞	獅子舞 獅子神楽	11月13日（例大祭） 3月第四土曜日（一万燈祭）	返田神社	返田	未指定

香取市内の獅子神楽・獅子舞



大崎の大和神楽



下小野神楽



多田の獅子舞



新市場の神楽

(2) 市内の獅子神楽・獅子舞の概要

①分布

獅子神楽および獅子舞は、市域の中央部及び西部の、主に佐原地区、栗源地区に広く分布している。市内には、前項で挙げている6件の獅子神楽のほかに、与倉地区、片野地区、堀之内地区、牧野地区にも神楽が継承されている。特に牧野地区の獅子神楽は、10年ほど前に復活して、鋭意継承に努めている。なお、高萩地区にも獅子神楽は伝わっているが、現在は休止中となっている。

一方、獅子舞（三匹獅子）としては、前項の2件の獅子舞のほかに、玉造・新寺地区、津宮地区、佐原八日市場地区、一ノ分目地区などがある。このうち、佐原八日市場の獅子は、7月の佐原本宿八坂神社の祇園祭礼に、一ノ分目の獅子は3月境宮神社の初午祭に、それぞれ御囃子が太鼓や笛で演奏しながら氏子地区内を歩いて一巡する道行が行われている。



香取市内の獅子神楽・獅子舞の分布

②系統・演目構成等

ア) 獅子神楽

獅子神楽とは、赤い顔の大きな獅子頭による「二人立ち」獅子舞で、前足にあたる獅子役が獅子頭を被って舞を担当し、後足役が獅子の後でホロをあしらう。大陸から渡ってきた伎楽系ぎがくに属し、その源流は熱田神宮を拠点とする尾張系と、伊勢神宮を拠点とする伊勢系があり、「大神楽系獅子舞」とも称される。市内の獅子神楽は、いずれもこの大神楽系獅子舞とされている。

その演目構成としては、神楽の開始、終了、登場に際して砂切さんぎり、馬鹿囃子ばかばやしなどの演奏ののち、布舞ぬのまい、幣束舞へいそくまい、鈴舞すずまい、剣つるぎの舞などの舞に相当する部分があり、その他に鬼しろうき、鍾馗しゅうき、医者いしゃと看護婦かんごふなどの余興芸よきぎに相当する部分からなっている。それぞれの演目については別表のような舞や余興芸があるが、奉納する場面や状況などに応じた組み合わせにより上演される。

イ) 獅子舞（三匹獅子）

獅子舞（三匹獅子）とは、獅子神楽の伎楽系ぎがくに対して、風流系ふうりゅうとされる。角を付けた獅子頭を一人で被る「一人立ち」獅子舞で、「獅子踊」「三匹獅子舞」とも呼ばれる。腹部に付けた太鼓を打ちながら舞い、背中に幣束などを付けている。中世末から近世初期にかけて京都を中心に流行した風流踊の一派として成立したものが、形を変えながら、関東地方に伝わり、その後、関東、東北地方に広く分布したとされる。市内の獅子舞は、雄二匹、雌一匹の三匹が一組となって舞う「三匹獅子舞」と呼ばれる型が伝承されている。

大崎の大和神楽 (大崎)	新市場の神楽 (新市場)	本矢作区の神楽 (本矢作)	下小野神楽 (下小野)	浅黄の神楽 (岩部)	多田の獅子舞 (多田)	返田の神楽 (返田)	返田の獅子舞 (返田)
馬鹿囃子	馬鹿囃子	馬鹿囃子	馬鹿囃子	砂切	砂切	馬鹿囃子	足どり
砂切	砂切	砂切	砂切	布舞	道笛	砂切	女獅子
布舞	布舞	布舞	幣束舞	幣束の舞	四方舞(雌獅子)	道	中獅子
幣束舞	幣の舞	剣の舞	剣の舞	剣の舞	四方舞(中獅子)	さんば	男獅子
鈴舞	鈴舞	鈴舞	布舞	怒り	四方舞(雄獅子)	小牧の舞	
	怒り	花掛り	花掛り		おかざき舞	剣の舞	
	剣舞		鬼		乱舞	幣の舞	
	鳥刺し		鍾馗			踊り	
	おかめひょっとこ		カム口萬歳			くるい	
	鬼		三河萬歳			鬼	
	鍾馗		道化萬歳			鍾馗大神	
	医者と看護婦		鳥刺し			医者看護婦	
	まどうまい		御神舞			鳥刺	
						萬歳	
						おかめ	
						獅子神楽	獅子舞

獅子神楽・獅子舞 演目一覧

(3) 市内の各所で奉納される獅子神楽・獅子舞

1) 大崎^{やまと}の大和神楽 (大崎地区)

大崎の大和神楽は、4月の第一日曜日に、地区内の白幡^{しらはた}神社、大六天神社^{だいろくてん}の祭礼で奉納される獅子神楽である。江戸時代に伊勢から来た集団により伝えられともいわれ、現在は大和神楽保存会により継承されている。4月中旬の香取神宮神幸祭でも、新市場神楽や下小野神楽とともに奉納されている。

大崎地区は、市の東部、下総台地^{やつだ}に谷田が入り組む場所に位置する。南北朝期の応安4年(1371)の香取神宮古文書に「大戸荘大崎村」と見える。地区の台地上には、千葉氏一族の国分氏に関連する大崎城跡(市指定史跡)がある。



大崎地区の景観



白幡神社の入口

①関連する建造物

◆白幡神社

規模・特徴等：本殿(一間社流造、銅板葺、1坪)、幣殿(銅板葺、1坪)、拝殿(入母屋造平入向拜付、銅板葺、7.5坪)

創建は、千葉氏一族の国分胤道^{こくぶたねみち}が矢作城^{やはぎ}を築いた時に守護神として奉祀されたとも伝わる。祭神は^{ほんだわけのみこと}誉田別尊。現社殿の建立時期は不詳だが、昭和43年(1968)に明治百年記念事業として区内社殿の整備が行われた際に、本殿を修復、幣殿を増築し、ともに銅板葺に改められている。



白幡神社



大六天神社

◆大六天神社

規模・特徴等：本殿(一間社流見世棚造、銅板葺、0.5坪)

祭神は皇産霊大神。現社殿の建立時期は不詳だが、昭和43年(1968)に明治百年記念事業として区内社殿の整備が行われた際に、改築、銅板葺きとなる。

②大崎の大和神楽〈市指定無形民俗文化財〉

地区の白幡神社、大六天神社の祭礼で奉納される獅子神楽。4月第一日曜日に奉納されるほか、香取神宮神幸祭でも奉納される。江戸時代に伊勢地方から来た集団により伝えられたとも言われる。第二次大戦前は、毎年4月3日に鎮守である白幡神社の祭礼で欠かさず奉納されていた。戦後、一時期休止した時期もあるが、昭和50年（1975）に大和神楽保存会が組織され、継承されている。

地区の長老の話では、かつては100戸余りある地区を一週間もかけて、御神酒を飲みながら村中を厄払いしたそうである（『身近にある文化財』より）。



大崎の大和神楽



囃子方

二人立ちの獅子神楽で、演目は舞が中心で、布舞、幣束舞、鈴舞などの優雅な舞を踊る。囃子方は、笛、太鼓、大鼓、小太鼓、摺り鉦すかねで構成されている。

午前10時頃に地区の公民館（おおさき区民館）を出発し、神楽用に装飾したリヤカーに用具を積み込み、お囃子を演奏しながら、まず白幡神社に向かう。到着後、10時30分頃から神楽が始まり、30分ほどで一通り舞が終わる。

その後、休憩、軽食を挟んで、11時30分頃に大六天神社へ移動を開始する。行きと同じく、お囃子を演奏しながら、徒歩とリヤカーで区民館へ移動し、そこで荷物を車に積み替え、大六天神社まで車で移動する。



白幡神社での奉納



神楽用に装飾したリヤカー

到着後、12時過ぎから神楽を開始し、12時30分過ぎに大六天神社での奉納が終了する。大六天神社での奉納後は、再び車で区民館へ戻り、そこでレクリエーションが行われる。

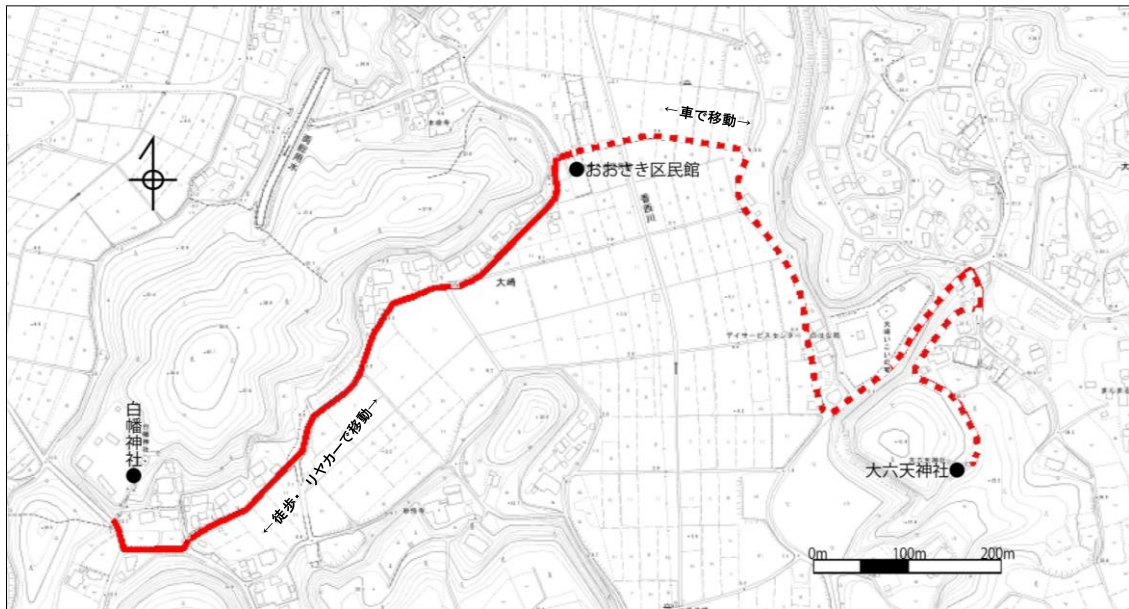


大六天神社での奉納



道行の様子

歩いて地区内を神楽が移動することを道行というが、元婦人会の方の話では、かつてはその行列も盛大で、婦人会でも衣装を揃えて手踊りを披露したりしていたこともあった。見物客も今よりも多く、三重に人だかりが出来るほどであったという。大六天神社での奉納は毎年ではなく、2年に一度行うことになっている。



道行（移動）の範囲

2) ^{にいちば}新市場の神楽（新市場地区）

新市場地区は、香取神宮の南隣りに位置する地区で、応永 8 年（1401）の香取神宮古文書に「新市場屋敷」と、その名が見える。新市場の神楽は、地区内の^{てんのみや}天宮神社に奉納される獅子神楽であり、毎年 5 月下旬の春祈祷、12 月 23 日の天宮大祭（鎮守祭）の 2 回奉納されている。4 月中旬の香取神宮神幸祭でも、大崎の神楽や下小野神楽とともに奉納されている。



新市場地区の家並み



新市場地区の景観

①関連する建造物

◆^{てんのみや}天宮神社

年代：元禄年間（1688～1703）

規模・特徴等：本殿（流造、銅板葺、1.5 坪）、
幣殿（銅板葺、2.5 坪）、拝殿（銅板葺、6 坪）

祭神は^{あめのみなかぬしのかみ}天之御中主神。本殿は元禄年間の建立である。明治末年に本殿、幣殿、拝殿等の改修がなされ、平成 7 年（1995）12 月に拝殿は新築されている。境内には、寛政 6 年（1794）11 月の手水石と、文化 4 年（1807）2 月の御神燈 1 対など多くの石造物が奉納されている。



天宮神社 本殿



手水石（寛政 6 年 11 月）



御神燈（文化 4 年 2 月）

②新市場の神楽<市指定無形民俗文化財>

天宮神社の祭礼に奉納される神楽。地元では江戸時代中頃から伝承されていると伝わる神楽で、出雲流に属していると言われる。

5月下旬の春祈祷、12月23日の天宮大祭(鎮守祭)のほか、4月15日の香取神宮神幸祭でも奉納される。戦後の一時期に中断したこともあるが、現在は新市場神楽親睦会により継承されている。

ちなみに、長く囃子方を務めている会員の一人の話では、その父親も神楽を行っていたとのことで、世代を超えて受け継がれてきている。

新市場の神楽は二人立ちの獅子神楽で、獅子頭を被った獅子役に、ホロをあしらう後足役のひよつとが付く。その演目は舞が中心となり、演目により獅子が御幣や鈴とものの採り物を持つ。5月下旬の日曜日に行われる春祈祷では、布舞、御幣の舞、鈴舞、怒りの順で舞が行われる。

12月23日の天宮大祭(おびしゃ)では、これらの舞にとりさ鳥刺しの演目加わる。演目としては、その他に余興芸もあるようだが、通常は舞が中心の奉納である。

囃子方は、大太鼓、小太鼓、大鼓、小鼓、笛、摺り鉦おおつみ こつみ す がねで構成されている。

平成30年(2018)の香取神宮神幸祭では、楼門前の境内で神楽が披露された。



神幸祭での奉納



神幸祭での奉納



神幸祭での神楽の披露



神幸祭での神楽の披露

3) ^{もとやはぎ}本矢作区の神楽（本矢作地区）

本矢作の伊勢神楽は、地区内の^{てんのみや}天宮神社、^{あまくだり}天降神社の2社に奉納される神楽である。毎年、3月第一日曜日の春祈祷、12月第一日曜日の御鎮事の2回奉納されている。

本矢作地区は、市中央やや東部よりの台地上に位置し、千葉氏の一族、国分胤道がこの地に居城（本矢作城）したと伝わる。

①関連する建造物

◆^{てんのみや}天宮神社

年代：享保6年（1721）

規模・特徴等：本殿（流造、亜鉛板葺、1坪）

祭神は^{さるとひこのかみ}猿田毘古神

◆^{あまくだり}天降神社

年代：享保6年（1721）

規模・特徴等：本殿（一間社流造、亜鉛板葺、1坪）、拝殿（寄棟造、亜鉛板葺、6坪）

祭神は^{あめのみなかぬしのみこと}天之御中主尊

なお、天降神社には、鎌倉末期の嘉暦年間（1326～28）に^{りゅうめん}龍面が同社のところに天降ったので祠を立て、その龍面を祀ったという伝説がある。^{あまご}雨乞いの龍面として知られる大戸神社の龍面がそのものであるという。両社とも、火難、盗難除けの神とされる三峰、古峯の両社を合祀している。

天宮神社、天降神社の境内入口にある鳥居は、いずれも同じ時期の明治23年（1890）7月に氏子中から奉納されたものである。また、天降神社社殿の裏手には、明治2年（1869）正月25日に奉納されたと思われる破損した手水石が置かれている。



本矢作地区の景観



天宮神社



天降神社



天降神社・手水石



天宮神社・鳥居



天降神社・鳥居

②本矢作区の神楽<市指定無形民俗文化財>

天宮神社・天降神社の祭礼で、天下泰平、区内安全、五穀豊穰などを祈願して奉納される。享保6年(1721)の両社の造営・遷宮に際して、神楽が奉納されたと伝わる。一匹の雄獅子が、布舞、剣の舞、鈴の舞、花掛りなどの舞を踊る。3月第一日曜日の春祈祷、12月第一日曜日の御鎮事で奉納する。以前は、地区の青年団で神楽を行っていたが、戦後青年団は解散したため、地区内の有志により続けられてきた。昭和63年(1988)、あらためて本矢作伊勢神楽保存会が結成され、現在まで継承されている。

囃子方は、昭和40年代までは、佐原の山車祭りの下座として乗り込んでいた。おもに乗っていたのは、本宿祇園祭では寺宿区てらじゆくの山車、新宿諏訪祭では新橋本区しもなかしやうの山車で、ほかにも下仲町区しんうわがし(本宿)、新上川岸区(新宿)などにも乗っていた。

神楽で使用する囃子方の用具は、大太鼓(長胴太鼓)1、小太鼓(附締太鼓)2、大鼓おおかわ1、小鼓4、笛4などがある。小鼓や笛などは個人持ちで、それ以外は区所有のものを保存会が借用している。なお、区には現在使用していない大正期の太鼓も残されていて、その内割りには「大正十年四月/東京宮本製/張人石川米三」との墨書が入っている。



囃子方の用具

現在使用しない太鼓の
内繰りの墨書

本矢作区の神楽は二人立ちの獅子神楽で、演目は舞が中心である。布舞、剣の舞、鈴の舞、花掛りの順で舞われる。昔から本矢作の神楽は武士舞と言われ、勇壮な舞である、とのこと。本矢作の獅子頭は雄で、着物は唐草模様の反物で七反が使用されている。その着物を縫う者は更年期を過ぎた女性に限られているそうである。

神楽歌として「剣の舞」で謡われる歌詞は次のとおりである。

- 一、あーこーの、せ いざあや神楽を
舞い遊ぶ
- 二、天野 岩戸を 押し開く
- 三、三尺の剣で 悪魔を祓う
- 四、目出度 目出度の 伊勢神楽
- 五、太平楽よと 改める



天宮神社での奉納

当日は、まず天宮神社から神楽の奉納が始まる。午後2時過ぎに砂切にあわせてゆっくり境内へ入場し、囃子方さんぎりが配置につくと、布舞から神楽が始まる。剣の舞、鈴の舞、花掛りと続き、30分ほどで終了。次に天降神社へ車で移動。



天宮神社での奉納

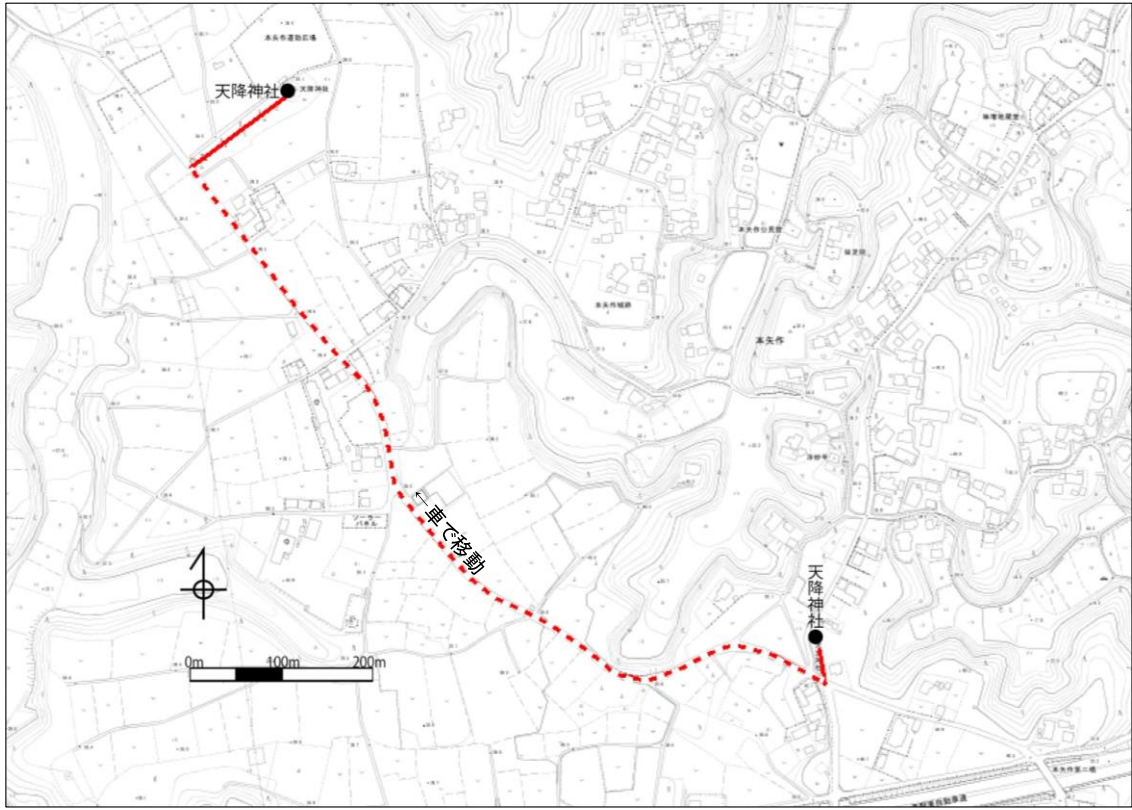
午後3時に、天降神社参道中程から砂切、太鼓の音で境内へ。同様に布舞、剣の舞、鈴の舞、花掛りと続き、30分ほどで神楽の奉納が終わる。



天降神社での奉納



天降神社での奉納



天降神社への移動（途中は車で）

4) ^{しもおの}下小野神楽（下小野地区）

下小野神楽は、毎年4月第一日曜日に地区内の八幡神社と稲荷神社の2社に奉納される獅子神楽である。4月中旬の香取神宮神幸祭でも、奉納されている。

下小野地区は、市の中央部付近の台地上に位置し、香取神宮社家の^{おおねぎ}大禰宜家相伝の所領で、保元元年（1156）の香取神宮古文書に「葛原牧内織幡・小野両村」とその名が出てくる。江戸時代、寛文・延宝期頃（1661～1680）に南方の現在地へ集落の居住地が移転したと推定される。



下小野地区の景観 八幡神社前

①関連する建造物

◆八幡神社

年代：（本殿）享保6年（1721）

（拝殿）寛政元年（1789）

規模・特徴等：本殿（一間社流造、亜鉛板葺、4坪）、幣殿（切妻造、亜鉛板葺、2坪）、拝殿（入母屋造平入、亜鉛板葺、6坪）

祭神は^{おうじんてんのう}応神天皇。寛文5年（1665）に玉井重右衛門が小野新田開墾成就祈願のため勧請したと伝わる。享保6年（1721）に現本殿が再建された。寛政元年（1789）に本殿の修繕と拝殿が造営された。その後、明治12年（1879）に本殿屋根を銅板葺きに改めるなど、幾度か修理が行われたが、平成27年（2015）に創建350年を記念して、本殿の修繕と玉垣改修、拝殿前石垣の組み直しなどの工事が行われている。境内には火除けの神である古峯神社の石祠がある。



八幡神社

◆稲荷神社

年代：安永元年（1772）

規模・特徴等：本殿（銅板葺、1.1坪）、幣殿（銅板葺、2坪）、拝殿（入母屋造平入、銅板葺、6坪）

祭神は^{うけもちのかみ}保食神。延宝の頃の新田開墾による集落の移住のあと、享保14年（1729）9月11日に社殿を現地へ奉遷し、村の鎮守としたと伝わる。その後、安永元年（1772）9月



稲荷神社

に現在の社殿を建立した。大正4年(1915)の奥宮稲荷神社を本社に合祀した。

②下小野神楽<市指定無形民俗文化財>

4月第一日曜日に地区内の八幡神社と稲荷神社に奉納される。大和神楽の流れをくむ獅子神楽系統の二人立ち獅子舞である。宝永元年(1704)に始められたと伝わる。昭和43年(1968)に神楽保存会が組織されたが、後継者不足のため、その後いったん休止となり、昭和60年(1985)に下小野神楽会があらためて組織され、現在まで継承されている。

明治期までは、大遊び、春祈願として、4月1日から五日間にわたって行われていたようであるが、その後、いつ頃からか4月3日、4日の二日間となった。一日目は午後3時過ぎから八幡神社と稲荷神社で奉納舞いをし、ついで区長宅前などでも舞った。二日目は宝蔵院の本堂で神楽を舞ったそうである。

獅子頭の内側には「□永元申五月納 工人鈴木左門正富」「嘉永元申正月 新調之」「再建 安政六未四月日」とある。宝永元年(1704)に獅子頭を製作し、嘉永元年(1848)に新調、安政6年(1859)に作り直されたものと思われる。

下小野神楽は、幣束舞、剣の舞、布舞、花掛りの順で、舞を中心に奉納する。このほか、鬼・鍾馗、三河萬歳、道化萬歳、カムロ萬歳、鳥刺し、御神舞などの演目も行う場合もある。

なお、下小野神楽は4月15日の香取神宮神幸祭でも奉納する。大崎の神楽、新市場神楽も参加するが、三者で順番に当番を決め、当番の年は神幸行列ののち、参道下の駐車場で齋行される駐輦祭ちゅうれんさいで奉納する。当番でない場合は、神幸行列出発前の境内で、短めに神楽を披露する。平成30年(2018)は当番であったため、駐輦祭にて奉納した。



下小野公民館での披露



神幸祭での奉納



囃子方



神幸祭での奉納

5) 浅黄の神楽（岩部浅黄地区）

岩部浅黄の神楽は、岩部の浅黄地区内の祖波鷹そぼたか大神での4月10日の祭礼で奉納される獅子神楽である。隣接する高萩地区から伝授されたもので、保存会の浅黄喜楽会が継承している。

岩部地区は、市の南部の台地上に位置する。南北朝期頃から下総国千田庄ちだのしょうの一つとして岩部郷との名称がある。



祖波鷹大神の入口

①関連する建造物

◆祖波鷹大神そぼたか

年代：延宝元年（1673）

規模・特徴等：本殿（一間社流造、垂鉛板葺、1坪）、拝殿（寄棟造、垂鉛板葺、13坪）

祭神は高皇産霊尊たかみむすびのみこと。長保2年（1000）祭神を勧請して創建したと伝わる。現本殿は、延宝元年（1673）に造営されたもの。昭和18年（1943）に星宮大神あめのみなかぬしのみこと（天御中主尊）を合祀し、境内には昭和22年（1947）建立の合祀記念碑が建つ。なお、同じ昭和22年に本殿、拝殿の改修と玉垣の新築などが行われ、平成12年（2000）には本殿屋根葺き直しや中殿の新設などが行われている。



本殿



拝殿



合祀記念碑（昭和22年建立）

②浅黄の神楽

岩部浅黄地区で継承されている獅子神楽は、隣接する高萩地区より伝授されたものである。

『栗源の百年』によると、浅黄の神楽は、明治末期頃に村の若者の間で賭博が盛んとなり、これを憂えた年配者の発案で行うようになり、浅黄笑娯会が誕生した。会員は18歳から35歳の若者30名ほどで、高萩の方々に指導を受けていた。3月の御奉射おびしゃの神楽奉納が主で、4月の村祈禱などでも頼まれていた。昭和15年（1940）頃に戦争で若者の応招が続き一時休止せざるを得なかったが、戦後まもなく再開した。その間10年余りであったようである。

その後、昭和47年（1972）からは浅黄喜楽会と名を変えて、現在まで継承されている。毎年4月10日に区内の安全祈願として祖波鷹神社祭礼で奉納される。

二人立ちの獅子神楽で、午前中の社殿での神事が終了したのち、正午過ぎに境内で奉納される。演目は、布舞、幣束の舞、剣の舞、怒りの順で、途中、厄払いとして、集まった子供たちを獅子頭で軽くかんでお祓いをする。下座の構成は大太鼓、小太鼓おおかわ、大革こかわ（大鼓）、小革（小鼓）、笛となっていて、これに獅子の舞方を加えて、15名前後で奉納される。なお、下座には、他に摺り鉦すがねもあるが、獅子舞では演奏に加わらない。



奉納の様子



奉納の様子



囃子方



奉納の様子

6) 多田の獅子舞（多田地区）

多田の獅子舞は、多田地区の妙見神社^{みょうけん}で伝えられてきた風流系の獅子舞（三匹獅子）である。12年に一度、午の年に斎行される香取神宮式年神幸祭にも供奉している。

多田地区は、香取神宮の東側に位置し、応保2年（1162）の香取神宮古文書にその名が見える。一説には平将門追討使として下総に来た多田満仲^{みつなか}がこの地に陣を敷いた際に、故郷の摂津多田荘（現兵庫県川西市）の地形に近似していることから名付けたとも言われる。



妙見神社の入口付近



多田地区の景観

①関連する建造物

◆ 妙見神社^{みょうけん}

年代：元禄16年（1703）

規模・特徴等：本殿（一間社流造、銅板葺、1.125坪）、幣殿（切妻造、亜鉛板葺、2.125坪）、拝殿（入母屋造平入向拝付、銅板葺、8.5坪）

祭神は天之御中主神^{あめのみなかぬしのかみ}。天慶の頃、多田満仲が本社を祀ったとも、また、多田胤時が武運長久を祈願して勧請したとも言われる。妙見さまは千葉氏の守り本尊で、多田氏もこの千葉氏の系統であることから、本社を創建したとされる。貞和4年（1348）、応永28年（1421）、元禄16年（1703）の棟札が残されていて、現在の本殿は元禄16年に建てられたものである。明治22年（1889）本殿屋根葺き替え、幣殿、拝殿の改修が行われた。



拝殿



本殿

②多田の獅子舞<市指定無形民俗文化財>

多田地区で伝えられてきた一人立ちの獅子舞（三匹獅子）で、無病息災、五穀豊穰を祈願して、鎮守妙見神社で奉納されてきた。古来より香取神宮の神幸行列にも供奉していたとされ、現在も12年に一度の香取神宮式年神幸祭の行列に加わっている。現在は、多田の獅子舞保存会が継承している。昭和32年（1957）7月「八坂神社沿革と祭事の記録及市内



多田の獅子舞の情景絵

各所に於けるまつりの情景絵」にも、当時の多田獅子舞の情景が描かれている。なお、獅子舞保存会の幟旗や半纏には「辱賜台覧」の文字が入る。読みは「辱（かたじけな）くも台覧（たいらん）を賜う」で、皇族などが御覧になる、との意味である。多田の獅子舞は明治、大正、昭和の三代にわたり当時の皇太子の台覧を賜ったことから、これを表したものである。

多田の獅子舞は、雌獅子、中獅子、雄獅子の三匹獅子と、猿、弓持ち、七夕持ちで構成されている。獅子は羽飾りを付けた獅子頭を頭に載せ、顎先から足先まで赤い布垂らしている。三匹の獅子が舞い、その周囲を猿が自由に動き回る。「砂切」、「道笛」のあと、「四方舞」、「おかざき舞」、「乱舞」の順で行われる。



奉納の様子

「^{さんぎり}砂切」：舞の直前と直後に演奏され、獅子舞の始まりと終わりを告げる。

「^{みちぶえ}道笛」：いわば行進曲のようなもので、道中を進む際はこの曲が演奏される。

「^{しほうまい}四方舞」（雌獅子、中獅子、雄獅子）：雌獅子、中獅子、雄獅子の順で一匹ずつ舞を奉納する。各獅子とも舞台いっぱいを使って四方の神様に無病息災、五穀豊穰を祈願する。雌獅子は優雅に、中獅子と雄獅子は力強く舞を行う。中獅子は若い獅子、雄獅子は年上の獅子で、角が長い方が雄獅子である。

「おかざき舞」：三匹一緒に舞う。前半は定位置で息を合わせた舞を披露し、後半では縦に並んで舞台を八の字に回る。後半になるに従い曲調は早くなる。

「乱舞」：舞の前半で中獅子と雄獅子が雌獅子を巡って争いを始める。中盤では、雄獅子は雌獅子に近づこうとするが、中獅子がこれを阻む。邪魔された雄獅子は中獅子と激しく争う。後半では、雌獅子が仲裁に入り、最後は再び

息を合わせて三匹で舞う。

猿はそれぞれの獅子を面白く真似て舞ったりして、場の雰囲気のを和ませる役どころとなる。乱舞では、争う二匹を茶化すような猿のしぐさが、面白みを演出している。

舞の途中では、「ひともとすすきはないけれどそこで雌獅子が」「かみより下るは唐絵の屏風、かんだひとえで」などのいくつかの掛け声が入る。



獅子頭



奉納の様子



奉納の様子

妙見神社での奉納では、午前10時過ぎに神事が行われ、10時30分頃から砂切、道笛により獅子が登場する。そして、雌獅子、中獅子、雄獅子それぞれの舞ののち、おかざき舞、乱舞と進み、30分ほどで神楽は終了する。その間、猿が自由に動き回り、獅子の真似をしたり、子供たちにお菓子を配ったりして、獅子舞を盛り上げている。

妙見神社での獅子舞奉納が終わったあとは、神楽の一行は用具をリヤカーに載せて、多田青年館^{みちゆき}まで道行を行うため、しばらくの間は地区内には、囃子方による道笛の演奏が地区内で聞こえている。



道行の様子



道行（移動）の範囲

7) 返田の獅子神楽・獅子舞（返田地区）

返田地区は、かつての香取神宮神領の一つで、弘安元年（1278）の香取神宮古文書に村名が見える。当地区にある返田神社は香取神宮摂社の一つで、香取神宮の遷宮・造替にあわせて返田神社も造替されていたようである。

返田神社では、二人立ちの獅子神楽と、一人立ちの獅子舞（三匹獅子）の両方が伝承されている。市内でも他に両方を伝える地区はなく、たいへん珍しい事例である。3月第四土曜日いちまんとうさいの一万燈祭には獅子神楽が、11月13日の例大祭には獅子舞が奉納される。



返田神社付近の景観



返田地区の景観

①関連する建造物

◆返田神社本殿＜市指定有形文化財＞

年代：元禄13年（1700）

規模・特徴等：（本殿）一間社流造、銅板葺

祭神は軻遇突智神かぐつちのかみ。創建は不詳、長治3年（1106）の古文書に「悪王子御社（返田神社）」と見える。香取神宮の摂社で、様式手法からみると17世紀末から18世紀初頭と考えられる。元禄13年（1700）の香取神宮本殿造営の棟札には、同時に造営、修復された社殿の一つとして返田社と記されている。明治15年（1882）修繕、同31年（1898）屋根の葺き直し、昭和4年（1929）本殿屋根を柿葺きから銅板葺きに改めた。参道両側には、文化3年（1806）の全国66箇所一の宮の石祠が建ち並んでいる。



本殿



一の宮の石祠

②返田の獅子神楽と獅子舞

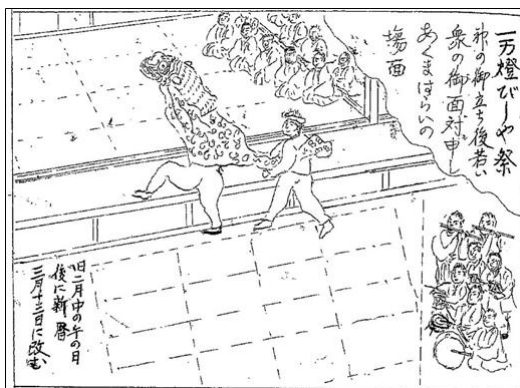
返田地区では、獅子神楽と獅子舞（三匹獅子）が継承されている。3月の返田神社一万燈祭には獅子神楽が奉納され、11月13日の例大祭では獅子舞が奉納される。また、香取神宮の式年神幸祭には、三匹獅子が供奉する。獅子舞は江戸時代に信州より伝えられたとも言われる。現在は返田郷土芸能保存会により継承されている。

昭和25年（1950）4月に返田神社の神職により著された「返田今昔物語」には「区には、獅子神楽の二種あり」とあり、便宜上、三獅子と大獅子と分け、それぞれについて、次のようなことが記されている。三獅子は、牡・中・牝の三頭があり、演技時間が三時間もかかり、よほどの奉祝ごとがなければ舞わない。また、大獅子の演目としては、舞五段から狂にいたる。狂の舞に附随して鍾馗、鬼退治の場面、道化医師の鬼治療の場で幕を閉じる。次に鳥刺し、萬歳、おかめ、内記の舞がある。

昭和26年（1951）6月の「旧例返田年中行事 絵こよみ」にもその様子が描かれているが、そこには「一万燈びしや祭・あくまはらいの場面」や「つるぎのまひ」を舞う獅子神楽と、「三獅子舞」を演ずる獅子舞の双方が描かれている。



三匹獅子舞の図（獅子舞）



一万燈びしや祭の図（獅子神楽）



つるぎのまひの図（獅子神楽）

3月最終土曜日の一万燈祭で奉納される二人立ちの獅子神楽では、午前10時に神事が始まり、午前10時30分頃から神楽が奉納される。布舞、剣の舞、幣束の舞の順に舞いが進み、30分ほどで終了する。かつては、余興芸などの演目もあったようだが、現在は舞が中心の奉納となっているようである。



獅子神楽の奉納



獅子頭（獅子神楽）



獅子神楽の奉納

11月13日の返田神社例大祭では、一人立ちの獅子舞（三匹獅子）が奉納される。演目は、足どり、女獅子、中獅子、男獅子が演じられる。



獅子頭（獅子舞）



獅子舞の奉納



獅子舞の奉納

(4) まとめ

二人立ちの獅子神楽は、ここで取り上げた6件のほか、与倉地区、片野地区、堀之内地区、牧野地区、休止中の高萩地区などを加えると、市域の中央部及び西部の、主に佐原地区、栗源地区に広く分布している。

一方、獅子舞（三匹獅子）としては、前項の2件の獅子舞のほかに、玉造・新寺地区、津宮地区、佐原八日市場地区、一ノ分目地区などで残されているが、その分布は上記の獅子神楽よりも狭く、市域中央部から北側、利根川南岸域にかけての範囲となる。

いずれの神楽も氏子などにより地区の鎮守の祭礼で奉納されるもので、普段は静かな境内も、この日は神楽のお囃子と集まった人々で賑わう風景が見られ、今にその歴史的風致が守られてきている。



獅子神楽・獅子舞に見る歴史的風致の範囲

